

# Nara Women's University

## Daddy/Mommyを用いた自己指示について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部 欧米言語文化学会 公開日: 2021-04-27 キーワード (Ja): 英語, 会話, 関連付け, 指示表現, 話し手 キーワード (En): 作成者: 須賀, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/5557">http://hdl.handle.net/10935/5557</a>

# Daddy/Mommy を用いた自己指示について

須賀 あゆみ

## 1. はじめに

英語では、話し手が自分のことを指すとき、通常一人称代名詞を用いる。例えば(1)の話し手は、母として子どもと向かいあいたい一方で、あるときは人間として、働く女性として、妻として生きなければならないとして、生まれただけの子供に対する葛藤を述べている。<sup>1</sup>

### (1) [BCC 105]

01 Cla: I don't want to- Well I do want to- I want-  
02 → As a mother I want to be there for her all  
03 the time and endlessly patient and (.)  
04 → available but as a human being and a working  
05 → woman and a- a wi:fe I just ca:n't be that  
06 self-sacrificing. (Land & Kitzinger (2007))

ここで話し手は一貫して主語に一人称代名詞を用いて、自分のことについて話そうとするとともに、*a mother, a human being, a working woman, a wife*のように、自分がどのような属性をもつのかを描写する表現を用いて、揺れる心情を吐露している。この例にみるように、指示対象が誰であることを示すことと、指示対象がどのような人物なのかを描写することは、通常、別個に行われる。英語では、話し手が自分のことを指示するとき、一人称代名詞を用いることが一般的であり、指示対象がどのような人物なのかを表す表現を用いて話し手自身を指示することは例外的である(Land & Kitzinger (2007))。

本稿ではその例外的とされる現象、すなわち、話し手が自分自身を指示するときに、どのような人物なのかを表す表現を用いる事例について取り上げる。

1 トランスクリプトの記号については文末の一覧を参照。

具体的には、話し手が *Daddy/Mommy* という親族呼称を用いて自分のことを指示する現象を扱う。例えば、(2) では、母親が幼い子供と接する時に、自分自身を *Mommy* という表現で指示している。<sup>2</sup>

- (2) a. *Olivia, Mommy's gonna make breakfast.*  
b. ((出かけた帰りに、母親が車を運転しながら、後部座席に座っている子どもと話している。)) *Mommy's favourite part about today was going to Starbucks, and opening up our books and just kind of reading them at Starbucks, like that was so much fun for me.*

(動画：バイリンガルベイビー, 日本語注釈は筆者)

ここで用いられている *Mommy* (「ママ」) という語は、指示対象が誰なのかを示すだけでなく、指示対象がどのような人物とみなされるのかということも示すために用いられている。

本稿では、英語の会話において、話し手が自分のことを指示する際に、*Daddy/Mommy* という親族呼称を用いる現象に注目し、このような指示表現を選択することによって何が成し遂げられているのかについて考察することを目的とする。第2節では、先行研究を参照し、本稿で扱う *Daddy/Mommy* という表現は、聞き手の存在を意識した表現であるということ、有標な指示表現として位置付けられるものであるということを確認する。第3節では、指示対象がその場にないときに用いられる *Daddy/Mommy* の使用について記述する。その上で、第4節では、映画の会話場面の具体例を用いて、*Daddy/Mommy* が自己指示に用いられる場合、話し手が受け手である子に対して、親として向き合っているというスタンスが示されるということを観察し、一人称代名詞 I を用いる場合とは異なる効果が生じることを明らかにする。第5節では、なぜ一人称代名詞 I ではなく、親族呼称の *Daddy/Mummy* が用いられるのかという問題について、*Stivers (2007)* の「関連付け」(*association*) という概念を援用することによって説明を試みる。この現象は、話し手・聞き手・指示対象の関係にお

---

2 *You Tube* から配信されている動画からの引用である。日本在住の英語母語話者がその家族(夫：日本語母語話者、子ども2人)との暮らしや会話を紹介している。

いて、聞き手と指示対象との距離を縮めるということがなされ、それゆえ親として子に向き合っているというスタンスを示すという効果が生じるということを主張する。

## 2. 先行研究

### 2.1. 聞き手を考慮に入れた指示表現

廣瀬・加賀（1997）は、「公的表現行為」（伝達を目的とした、社会的営みとしての思考表現行為）と「私的表現行為」（伝達を目的としない、個人的営みとしての思考表現行為）という概念を提案している。そして、これらの根本的な違いは、前者では聞き手の存在を考慮に入れるが、後者では考慮に入れないという点にあると述べている。

英語では一人称代名詞の I は、公的自己（公的表現行為の主体）を表す固有のことばであると考えられており、英語の I は、聞き手と対峙する伝達主体としての話し手という意味を内包している公的表現として特徴付けることができると述べている。ただし、英語の場合も、例外的に、公的自己を指すのに I 以外のことばがあるとし、(3) に示すように、父親が自分を指して Daddy, Dad を用いる現象があることを指摘している。

(3) a. Daddy wants you to sit still.

b. Dad thinks it would be bad manners not to wash your hands before dinner.

He wants you to be a good boy. (廣瀬・加賀（1997）)

廣瀬・加賀（1997）は、(3) の動詞 *want*, *think* が三人称単数の形式をとっていることや (3b) で *Dad* を *he* で受けていることから、主語の *Daddy* や *Dad* は三人称として扱われ、ある意味で客観的に自分のことを記述していることになると述べている。そして、一人称代名詞 I を使用できるところを、わざわざこのような言い方を選択するときには、それなりの表現効果が期待されると考えられており、(3) のような場合は、「子供に対して間接的に注意を促すという含意がより強く出てくる」(14) と述べている。

廣瀬・加賀（1997）は、親が自己指示に用いる親族呼称は、聞き手の存在を

考慮にいれた表現であるということ、一人称代名詞ではなく、あえて例外的な表現を選択することによる効果もたらされるということを示唆している。このことを踏まえて、本稿では、Daddy/Mommy を用いた自己指示によって、どのような効果もたらされるのか、また、なぜそのような効果もたらされるのかについて考察を行う。

## 2.2. 聞き手と関連付けた有標な指示表現

有標な指示表現の使用については、会話分析を用いた研究においても議論されている。会話者は、受け手・聞き手が誰であるのか、どういう関係にあるのか、どのようなことを知っているのかなどを考慮して、会話のその場その場で適切と思われる表現を選択している。そして、ある人物を指示する際に通常用いる表現とは異なる表現が選択されるとき、単に対象を指示する以上のことを成し遂げるために、会話の状況にふさわしい表現が選択されたものと捉えられる (Schegloff (1996))。

Land & Kitzinger (2007) は、話し手が自分自身を指示する際に、一人称代名詞 I 以外の表現 (例えば、人物の名前や、第三者の視点から捉えた描写など) を用いるさまざまな現象を取りあげ、指示表現は、単に指示対象が誰なのかを伝えるだけでなく、指示対象がどのような人物なのかを描写することも同時に行うことができ、それゆえ会話の中で行われている活動に貢献する側面があるということを指摘している。

本稿で取り上げる Daddy/Mommy も、無標の一人称代名詞を用いずに選択された有標な指示表現とみなすことができると考えられる。この有標な指示表現を用いることによって、どのようなことが成し遂げられているのだろうか。

Stivers (2007) は、聞き手が認識可能と想定する第三者を指示するときに、話し手が通常用いる表現とは別の表現を用いる現象に着目し、「関連付け」という概念を用いて考察している。例えば、話し手が自分の母親に対して、母方のおばに対する不平を言うとき、(4) のように、通常 Aunt Alene という表現を用いるところを、聞き手と関連付けた your sister という表現を用いるような場合である。

(4) MOM: So what are you grinning?

→ NIC: Cos *your sister* been on the phone all morning and I told her...

(Stivers (2007) 一部改変)

Stivers は、このように話し手が、関連付けを用いた表現を選択するとき、話し手・聞き手・指示対象という三者の関係が、通常の指示表現を用いたときとどのような違いがあると捉えられるのかを議論している。(4) の場合、話し手は、指示対象であるおばを聞き手である母の責任の範疇にあるものと捉え、それにより聞き手と指示対象との距離を縮めることになり、その結果、二次的に話し手と指示対象との距離を離すということが行われると述べている。これが、話し手が母に向けおばに関する不平を述べるという行為と合致すると述べている。

本稿では、話し手が自己指示の際に Daddy/Mommy を用いる場合についても、この Stivers (2007) の「関連付け」の概念が援用でき、そうすることにより、会話のその場の状況において、当該の指示表現が選択される理由を説明することができるのではないかと考えている。Stivers の議論については、5.1 節で詳しく述べることにする。

### 3. 第三者を指示する際に用いられる Dad (dy)/Mom (my)

#### 3.1. 子が親を指示する場合

会話の場に存在しない人物を指示する際に、Daddy/Mommy という表現が用いられる現象についてまず見ておきたい。この場合、Daddy/Mommy は、家族の間で通用する表現として用いられる。例えば、兄弟姉妹が自分たちの親を指示するとき、Daddy/Mommy が用いられる。(5) は、大人の姉妹による電話会話の一部である。

(5) A: I had a letter from *Mommy* yesterday.

B: Oh what did she say?

(CallHome English eng4335)<sup>3</sup>

3 CallHome English は、1990 年代に Linguistic Data Consortium によって構築された電話会話のデータベースの一部であり、話し手が海外で暮らす家族・親族や友人と行った会話が収録されている。(Mac Whinney, B. (2007))

A は自分たちの母親を指示するとき、Mommy という呼称を用いている。ふたりの会話は家庭内の話題である。このように、家族の間では、Daddy/Mommy を大人になっても通用する指示表現として使うことができる。

### 3. 2. 子どもの目線からみた Dad (dy)/Mom (my)

Daddy/Mommy は子どもの目線を考慮して使われる表現である。このことを証拠づけるデータとして (6) を見よう。

話し手ダニエルには、建築家の妻との間に 3 人の子ども（長女リディア、長男クリス、次女ナタリー）がいるが、妻と離婚して家を出たため、週に 1 回だけ面会が許されている。ダニエルは子どもたちを愛し、子どもたちもダニエルを慕っている。この場面は、引っ越したばかりで片付いていないダニエルの部屋で 4 人が食事をしながら話をしているところである。

(6) ((ダニエルが食べ物の方 (下) を向いて))

→DANIEL: How is *the old battle-ax*? Huhh

((ダニエルが子供たちを見渡す。こどもたちは黙っている。))

→DANIEL: *Mom*.

CHRIS: *She's fine*.

DANIEL: Oh, I'm glad to hear that.

DANIEL: I'd hate to think that *she* came down with amebic dysentery or piles.

(映画: *Mrs. Doubtfire*, 00:24:48, 日本語注釈は筆者)

最初に、ダニエルは別れた妻のことを指すとき、*the old battle-ax* という表現を用いている。このとき、最初から *How's Mom?* とすることもできたはずだが、あえて、*the old battle-ax* という描写を選択している。この定表現を用いることによって、聞き手が同定可能な人物を指しているということを示すとともに、*old battle-ax* という描写によって、この人物に対する評価や感情を表明している。

*How's the old battle-ax?* と発話した後、その質問への応答が期待される連鎖上の位置で、子どもたちからは何も反応が返ってきていない。そこで、ダニエ

ルは、Mom という表現を用いて、同じ人物を指示し直すことにより、クリスから応答を得ている。

この修復現象からわかることは、最初に元妻のことを話し手の目線で描写した the old battle-ax よりも、子どもたちにとって、家族間で通用する Mom を使った方が適切であるということである。そして、そのことをダニエルもわかっていたということが見て取れる。したがって、Mom という表現は、会話のその場で、話し手ダニエルが聞き手である子どもたちのことを考慮して、子どもたちの目線から用いた表現であるということができる。

#### 4. 自己指示としての Daddy/Mommy

##### 4.1. 子どもに対する Daddy/Mommy

では、話し手が親族呼称を用いて自分自身を指す現象について見ていくことにしよう。まず、誰を受け手として Daddy/Mommy が用いられるのだろうか。(7-8) は、同じ映画の同じ登場人物が、別の受け手に対して、同じ行為を行う場面である。

(7) ROSEMARIE : Mama, I want to eat, too.

MAE : *Mommy will get you some, honey.*

(映画 : *Cinderella Man*, 00:09:24)

早朝目が覚めてしまった幼少のローズマリーは、寢床から起きてきて、台所にいる母親メイに食べ物のをせがむ。それに応じて、メイは、*Mommy will get you some, honey.* と言い、娘を抱きよせて頭にキスをする。ここで、母親のメイは、幼い娘のローズマリーの要望に応える発話をするとき *Mommy* という呼称を用いている。

今度は、同じ話し手メイが夫の要望に応じる場面を見てみよう。(8) は、(7) の直前の場面で行われた会話である。

(8) JIM: I can't find my socks.

((メイはジムの声でローズマリーが目を覚ましてしまうことを恐れて))



MAE: Shh! Jim!

JIM: I'm sorry.

((寝床からローズマリーの声が聞こえる。))

ROSEMARIE: Mama.

MAE: Great.

JIM: I'm sorry, baby.

→MAE: I washed them last night. Took them right off your feet.

Don't you remember?

JIM: No. (映画: *Cinderella Man*, 00:08:53, 日本語注釈は筆者)

メイは、聞き手からの要望に応えるという同じ行為を実践する際、夫に対しては I を用いているが、子に対しては Mommy を用いている。このことから、自己指示に用いられる親族呼称は、親が子に対して用いるものであるということが言える。

#### 4.2. 子に向き合う親としてのスタンス

前節では、親が子に対する発話で自己指示の Daddy/Mommy が用いられることを見た。Daddy/Mommy という表現は、単に誰のことを指すのかを示すだけでなく、どのような人物であるのかを示すことができる表現でもある。この表現は、発話の受け手である子どもの目線から用いられる表現であり、話し手が子に対して親として向き合っているというスタンスを示す資源となっている。

(9) の例を見よう。母親のメイが病気にかかってしまった息子ハワードに愛情をもって接する場面で、Mommy が用いられている。この会話の背景を説明しよう。不景気で一家の財政はどん底だった。母メイは3人の子どもたちといっしょに、営業していない店舗の囲いの木材をはがしてきて、ストーブにくべて暖を取らねばならぬほどだった。末っ子のハワードが病気になっても、何もしてあげることができずにいた。(9) の冒頭で、メイが眠っているハワードに声をかける。二度 Baby? と呼びかけた後、Look at Mommy. とハワードに向かって言う。ここで Mommy が用いられている。その声を聞いてハワードが寝返りを打ったとき、その熱っぽい顔を見てメイは涙ぐむ。メイの背後の少し離れた

ところに長女のジェイと次女のローズマリーがひとつのいすに腰掛けている。母親の背中の向こうで何が起きているのか心配になったジェイが Mommy? と呼びかけ、どうかしたのかと尋ねる。メイは、何でもないと答え、ハワードの方に向き直り、*Mommy will be right back, okay?* と言って、小走りに部屋を出て行く。そして、子どもたちに悟られないように屋外で涙を流すのである。

(9) MAE: Nice and warm, huh?

MAE: Baby?

MAE: Baby?

→MAE: Look at *Mommy*.

((ハワードが寝返りをうつ。母親の方に顔を向ける。))

MAE: Oh, sweetheart.

((メイは泣きそうになるのをこらえる。))

((ジェイとローズマリーは、メイの背後から様子をうかがっている。))

JAY: Mommy?

JAY: What's wrong?

MAE: Nothing, sweetheart.

((ハワードの方を向いて))

→MAE: *Mommy will be right back, okay?*

(映画: *The Cindellera Man*, 00:35:21, 日本語注釈は筆者)

メイによる二度の Mommy の使用は、どちらも幼いハワードに宛てた発話内で起きている。この Mommy は、子どもたちがメイを呼ぶときに使う呼称である (実際、ジェイがそう呼んでいる)。メイはハワードの目線から見た Mommy という呼称を用いて自己指示を行っているが、仮に同じ発話で、一人称代名詞を用いて、*Look at me.* や *I will be right back, okay?* と言ったとしたら、親として子に向き合っているというスタンスを示す効果は薄れてしまうだろう。

母親が Mommy という表現を用いて自己指示を行う例をもうひとつ挙げる。

(10) の話し手は、ファッション雑誌のカリスマ編集長である。職場では、ミ

ランダは新人秘書のアンディに様々な指示を出し、無理難題を課すこともしばしばであった。徐々にミランダに認められつつあったアンディだったが、あるときミランダの指示どおりに行動できず、ミランダの機嫌を損ねてしまう。アンディがそのことを謝罪しようとしたとき、ミランダは子どもたちのためにハリポッターの新作を手に入れるよう命じた。「新作」とは出版前のゲラのことである。出版関係の職場にいるのだから、そのくらい手をつくして何とかせよ、というのである。その直後に、ミランダの携帯に子どもたちから電話がかかってくる。ミランダは(10)のように話す。ミランダには小学生の双子の女児がいる。1行目の **Bobbsey** とは、アメリカで人気があった児童小説の双子の登場人物の名前であり、それにちなんでミランダは自分の子どもたちを **Bobbsey** と呼んでいる。

(10) MIRANDA: Yes, Bobbsey?

I know, baby. *Mommy's working very hard to get it for you.*

(映画: *The Devil Wears Prada*, 00:49:45)

ここで、ミランダは **Mommy** という呼称を使って自身を指しているが、受け手である子どもたちを指示する表現には、二人称代名詞 **you** が用いられていることに注目したい。子どもたちの呼称を用いて、**Mommy's working very hard to get it for Bobbsey.** とは言っていない。つまり、受け手に関しては代名詞の使用というデフォルトの方法がとられている。(ちなみに、共有された話題であるハリポッターの新作も、代名詞 **it** を用いて指示されている。)一方、ミランダは自分自身を指示する際に、**I** ではなくあえて **Mommy** という表現を選んでいる。なぜだろうか。

この場面では、アンディにとっても、映画の視聴者にとっても、ミランダの発話しか聞こえない。しかし、ミランダが携帯をとった後の第一声が **Yes, Bobbsey?** という発話であり、その後、**I know, baby.** と、さきほどアンディに指示を出したときとは打って変わって、高いトーンで優し気に発話している。電話の向こうにいる相手がミランダの子どもたちであるということが分かる。その後の発話の主語位置で **Mommy** を用いている。このように、**Mommy** を用い

た自己指示によって、話し手が母として子どもたちに愛情をもって向き合っているというスタンスを発話の中に組み込むことができる。話し手は Mommy という指示表現を使うことによって、単に指示対象を同定するということ以上のことを行っているのである。

親族呼称を用いて自己指示を行うのは母親だけではない。次に、父親が子どもに宛てた発話で、自分のことを Daddy という呼称を用いて指示する例を挙げよう。

父親のサムは、知的障害を持ち7才と同等の知能しかないとされていた。娘のルーシーが誕生後すぐに妻が行方をくらましたため、サムはコーヒーショップで働きながら、男手ひとつでルーシーを育てようとするが、養育能力がないと指摘され、ルーシーは施設に保護されてしまう。サムはルーシーと一緒に暮らしたい一心から、法廷で争う意を決し、弁護士を雇う。ある日、ルーシーの思いつきで、二人は逃亡しようとしたが失敗する。(11) は、その翌日、ルーシーが検察官 Mr. Turner の尋問を受けている場面である。サムは別室で、スクリーン越しにその様子を見守っている。昨日どこで過ごしたのかという質問に対し、ルーシーがうその証言をしたので、サムは真実を言ってほしいと願い、スクリーンに大きく映し出されたルーシーの顔にほおずりしながら、Daddy's right here. と言う。

(11) SAM: You have to tell the truth.

MR. TURNER: Lucy, are you afraid to tell the truth, 'cause you're gonna hurt your Daddy's feelings?

((サムはスクリーンに映し出されたルーシーの顔にほおずりして))

→ SAM: *Daddy's right here.*

SAM: And you can tell the truth.

MR. TURNER: Isn't it true that deep down inside, very deep inside, you know you need much more than your daddy can give you?

LUCY: All you need is love.

(映画： *I am Sam*, 1:10:23, 日本語注釈は筆者)

#### 4.3. 一人称代名詞と Daddy/Mommy の選択

本節では、親が幼い子に宛てた発話の中で自分のことを親族呼称で指示する例を見て来た。しかし、親が子どもに向けて発話する際に、必ずしも常に親族呼称を用いるわけではない。(12)では、娘のケイティは父親ジェイクのことを Daddy と呼んでいる。しかし、父親は自分のことを一人称代名詞を用いて指示している。ジェイクはケイティのことを通常は Potato Chip というニックネームで呼んでいる。ジェイクがケイティを部屋中追いかけて回すのをジェイクの妻パトリシア（ケイティの母親）が見ている。

(12) JAKE: Potato Chip? Potato Chip?

YOUNG KATIE: I'm here.

JAKE: Here *I* come! *I*'m a hungry bear!

PATRICIA: Run, run, run, run!

JAKE: *I* want the Potato Chip! Rawr!

YOUNG KATIE: *Daddy!*

JAKE: Guess who's home! Oh! (映画: *Fathers and Daughters*, 00:00:00)

ジェイクは小説を書いて生計を立てている。この映画の冒頭では、父ジェイクと母パトリシアと娘ケイティの家族3人で暮らしていたが、自動車事故で母親が急逝し、ジェイクは男手ひとつでケイティを養うことになる。ここで、ジェイクがケイティに対して、一人称代名詞 *I* と Daddy とを使い分けている場面を取りあげよう。(13)と(14)は連続した場面である。夜、ジェイクはアパートの書斎で本を書いている。そこへ、ケイティは家の中で自転車に乗ったままジェイクのそばまでやってきて、話しかける。

(13) Young Katy: You know what Julie said to me today?

JAKE: Uh-uh.

Young Katie: She said that when we're older we're all going to ...

JAKE: Hey, I gotta concentrate. Why don't you get ready for bed?

Young Katy: Is there a book tonight?

JAKE: Not tonight. No.

Young Katy: Why?

→ JAKE: Cause *Daddy's* working, baby.

Young Katy: You're always working.

JAKE: Uh, you'll just have to get used to it for a while.

Young Katy: Well, well, Julia's dad reads two books every night.

JAKE: Well, you got ripped off in the parent department. What can I tell you?

(映画: *Fathers and Daughters*, 01:18:36)

ケイティは父親に学校で起こった出来事を話そうとしても、読み聞かせをせがんでも、相手にしてもらえなかったので、怒って、父親の机の上にあった紙類を床に叩き落してしまう。すると、ジェイクは声を荒げて、次のように言う。

(14) JAKE: Katie! Damn it!

→ : Hey, you know why I'm working?

: For you!

: Cause we need money!

: For lawyers! Money for food! Money for clothes! For school!

Keep a roof over our head!

: Because we live in the United States of Money!

: Art, friendship, love, none of that matters!

: Only money!

: Katie! (映画: *Fathers and Daughters*, 01:19:14)

(13) において、ジェイクは、*Daddy* という表現を用いて「お父さんはお仕事してる」と述べている。仕事という事情により、今夜はケイティに絵本を読んであげることができないということを納得させるべく発話したとき、*Daddy* という表現を用いている。他方、(14) では、ジェイクはケイティのとった行動に怒りを感じ、なぜ仕事をしないといけないか、というとそれは、「お前のためだ、お金が必要だから」と言い放っている。そして、その怒りは社会に向

けられ、この社会で父子が生き抜いていくために、自分は働いているのだと述べている。

それぞれの場面で、ジェイクが娘に対して使った呼称に注目すると、(13)では *Daddy's working, baby.* のように、ケイティに対して *baby* と呼びかけているが、(14)では、*Katie!* と、名前を呼んでいる。(12) で見たように、ジェイクは、普段、愛情をこめてケイティを呼ぶときには *Potato Chip* というニックネームを使うのだが、(14) ではファースト・ネームが使われている。このことから、(13) では、幼い娘に対する父として向き合うスタンスが示されているが、(14) の場合は、ケイティのことを子ども扱いしていないということが見て取れる。(14) の場面では、ジェイクがもはやケイトに対して、親として接することができるだけの心の余裕を失った、ということが示されている。以上、まとめると、会話の相手が幼い子どもであるからといって、常に *Daddy/Mommy* が用いられるわけではなく、会話のその場その場の状況に応じて、話し手が親として子どもに向き合っているというスタンスを示す際に *Daddy/Mommy* が使われるということが言える。

## 5. 聞き手の視点を介した指示表現

では、なぜ親である話し手が一人称代名詞 I ではなく、*Dadd/Mommy* を用いることで、子に向き合う親としてのスタンスを示すことができるのだろうか。本節では、Stivers (2007) による「関連付け」(association) という概念を用いて考察する。

### 5.1. 受け手と関連付けた表現

Stivers (2007) は、聞き手が認識可能な第三者を指示する際に、デフォルトの指示表現形式を使わずに、聞き手と関連付けた名詞句を用いる現象について議論している。例えば、(15) に示すように、話し手が自分の母に対して、おばのことを *your sister* という表現で指示するような場合である。これは、Nichole (NIC) とその母 (MOM) との会話である。<sup>4</sup> NIC は美容院を営んでいる。そこに MOM がやってきて、当日の晩に地域の公園で行う NIC の息子

4 トランスクリプトの記号については文末の一覧を参照。

(MOM の孫) の誕生パーティーの準備について話し出す。MOM は「あれはコストコで買うと安い」という提案をする (2-3・5 行目)。NIC はその発話の途中でため息をつき (4 行目)、発話が終わると笑みをうかべている (7 行目) ことから、否定的な態度がうかがえる。その後、NIC は、MOM が *that staff* と言ったものが何なのかを明らかにすべく、*Which staff.* と言って修復を開始するが、実は何について述べているのかはわかっているようである。そのことを察知した MOM は、9 行目で NIC に、なぜにんまりしているのかと尋ねる。すると、NIC は、11 行目で、おばがパーティーの準備はできているかと朝から電話をかけてきて長時間話をしたからだと不平を述べている。このとき、NIC はおばのことを *yer s:ister* (*your sister*) という表現で指示している。13-14 行目のやりとりから、NIC は母方のおばが複数人おり、そのうちのひとりに言及するには *Aunt Alene* という表現を選択することが可能であるにもかかわらず、あえて *your sister* という表現を選択したということが見て取れる。

(15) [Stivers (2007): HS 5 7-23-03 T1]

- 01 MOM: H=hhah::: boy.  
 02 MOM: Y'know ah wuz thinkin maybe some uh that  
 03 stuff would be cheaper at uh  
 04 NIC: hhhh  
 05 MOM: Costcos, ((*N smiling*))  
 06 (1.3)  
 07 NIC: Which stuff. ((*possible smile voice*))  
 08 (1.6)  
 09 MOM: so- what are you grinnin' (cuz you picked)  
 10 [( )  
 11 → NIC: [Cuz yer s:ister been on the phone all  
 12 mo:rnin' an' I told'er-  
 13 MOM: ^Which o:ne.  
 14 → NIC: Aunt Ale:ne? [I got a cramp in my=  
 15 MOM: [hehhehhehhehhehheh



- 16 NIC: =ne:(h)ck 'n I gotta g(h)o.  
 17 NIC: so=  
 18 MOM: = ^Whut did she [want.  
 19 NIC: [Sh:e wanted =tuh=w=uh:  
 20 everything.  
 21 (.)  
 22 NIC: “Didju check on tha park=didju’-ah sed let  
 23 me tell you sump’in. Ah ain’ checked on  
 24 nuthin’. If y-anything you wanna do? get  
 25 on thuh phone ’n do it. =so she done called  
 26 Nimvolia park,... (Stivers (2007:78-79))

このように、話し手が受け手も知っている人物を指示するとき、名前ではなく、*your sister* という表現を選択することについて、Stivers (2007:78-80) は「関連付け」(association) という概念を提案し、次のように説明している。話し手と聞き手がお互いに指示対象の名前を知っている親族の間では、名前が無標（デフォルト）の形式である。しかし、ここでは、親族のひとりを指示すること以上のことを意図していることを伝える手段として、「関連付け」という方法がとられている。話し手 NIC は、自分の母方のおばのことを *your sister* という受け手 (MOM) と関連付けた表現を用いることによって、指示対象 (おば) を母親の責任の範疇に置くということが行われる。この表現の選択は、NIC の不平の原因は MOM にもあるということ伝えることに貢献している。また、Stivers は、話し手が指示対象を聞き手と関連付けた結果、二次的に、指示対象と話し手の関係が遠ざけられると述べている。そして、「話し手 (Speaker)」「受け手 (Addressee)」「指示対象 (Referent)」の関係を図 1 のように表している。

(15) の事例では、NIC は *your sister* という表現を用いることで、おばと電話で話

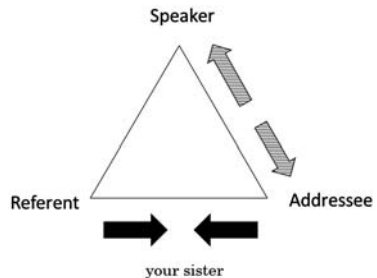


図 1

したことが、MOM が美容室に来てすぐに始めた話題と同じだったということは、おばと母との関係から容易に予想されることであり、そのため、母は自分とおばとの間で起こったことに同情してくれるはずだと思っているということが伝えられる。実際、NIC の不満を察した MOM は 18 行目で、「Alene おばさんが何をしたいと言っていたのか」と NIC に尋ねていることからそうであることがわかる。

## 5. 2. 第三者を指示する場合

この「関連付け」の概念は、親が子を受け手とした発話の中で第三者を指示する事例にも適用できる。Stivers (2007) は、母が子に対して、夫(子の父)が自分たちを置いて出て行ったということを表すとき、*Your father left me the other night.* と発話した例を挙げている。また、筆者が収集した映画の事例にも次のようなものがある。(16) では、父親ハルが娘のテスに対して、亡き妻のことを名前ではなく、*your mother* という表現を用いて指示している。(16) の直前にハルはテスから婚約の報告を受けている。その場には、テスの婚約者のジョージとテスの姉ジェインも同席している。ジョージはジェインの職場の上司であり、実はジェインがひそかに思いを寄せていた人物であった。しかし、そのことを知らないハルは、テスの婚約をととても喜び、別室から亡くなった妻が当時着ていたウェディングドレスを持ってきて、テスに差し出す。

(16) HAL: Tess.

((テスが立ち上がる))

TESS: Daddy!

→ HAL: *Your mother would've wanted you to have it.*

TESS: Daddy, thank you!

HAL: Okay.

((ふたりはハグし、ジョージは、困惑しているジェーンをちらりと見る。))

TESS: Thank you.

HAL: Okay.

TESS: Jane, you don't mind, right?

JANE: No. No.

TESS: I mean, you can have it after me.

→ JANE: No. That's good. It's right. That's what *Mom*, yeah, *Mom* would've wanted that. Yeah. *Mom* would've wanted that.

(映画: *27 Dresses* 0:42:12, 日本語注釈は筆者)

ハルは、*Your mother would've wanted you to have it.* (母さんもお前にあげようと思っていただろう。)とテスに言うとき、名前ではなく、受け手と関連付けた *your mother* という表現を用いている。Stivers の説明を適用すると、ハルは *your sister* という表現を用いることによって、指示対象を発話の受け手であるテスの責任の範疇に置き、テスと母との距離を近づけるということがなされることになる。また、二次的に、話し手 (ハル) と指示対象 (亡き妻) との距離を離すということが行われることになる。妻と娘の距離を近づけ、自分と妻の距離を離すという効果は、亡き妻の母としての娘に対する気持ちを想像して述べたハルの発話の趣旨に合致している。このように、「関連付け」という概念を用いることによって、なぜ名前ではなく *your mother* という聞き手を介した表現を選択したのかを説明することができる。

### 5.3. 受け手と関連付ける *Daddy/Mommy*

親が子に対して自分自身を指すために用いる *Daddy/Mommy* は、聞き手の存在を意識した有標な指示表現であり、*your father/mother* と同様に、指示対象を受け手と関連付けた表現であるとみなすことができる。そこで、Stivers の「関連付け」の概念を *Daddy/Mommy* を用いた自己指示の現象に応用し、どのようなことが言えるか検討してみたい。先に紹介した発話をもとに考えてみよう。

(17 (=2a)) *Olivia, Mommy's gonna make breakfast.*

(18) *Olivia, I'm gonna make breakfast.*

*your mother* を用いて第三者を指示する場合 (例 (16)) は、話し手と指示対

象は別の人物である。Mommy を用いた自己指示の場合は、話し手と指示対象は、物理的には同一人物であるが、実際に発話する人を「話し手」、親としてのスタンスを示す対象を「指示対象」と分けて考えることにする。ここで用いられている Mommy は、発話の受け手である子どもと関連付ける表現である。この表現を用いることによって、話し手は、指示対象である「親」と受け手である「子」との距離を近づけるということが成し遂げられる。これにより、親として子に対して向き合っているというスタンスを示すということが説明可能となる。

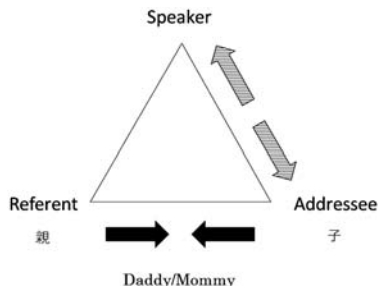


図 2

この効果は、(18) のように一人称代名詞 I を使うときには出でこない。その場合、朝食をつくるのが話し手自身であるということを伝えること以上のことは伝えられない。

親が子と向き合っているというスタンスは、固定的なものではなく、会話のその場その場の状況に応じて立ち現れてくるものである。3 節で見た (7-11) の事例では、親が子の要望に応じる場面であった。一方、4 節で見た (14) の事例では、父親が仕事中は子供の要望に応えられないということを示す場面であった。ただ、いずれの場合も、話し手は親として子に対して向き合っているというスタンスが示されている。自己指示に用いられる Daddy/Mommy は、「親」と「子」の距離を近づけ、話し手がそのようなスタンスを持っていることを示すのに寄与している。

最後に、廣瀬・加賀 (1997) が (3) の例について述べている「子供に対して間接的に注意を促すという含意がより強く出てくる」という効果について、考えてみたい。

(19=3a) Daddy wants you to sit still.

廣瀬・加賀 (1997)

「間接的に」という側面については、Stivers が指示対象と受け手の距離を縮めることによって二次的に生じるとしている「話し手と指示対象との距離を

離す」という側面が関わっていると考えられる。実際に発話する人が「話し手」、親としてのスタンスを示す対象が「指示対象」であるとすると、「話し手」と「指示対象」(親)との距離が離れるということから、子に対する行為を「間接的に」行うという意味合いが強まるということが説明できるのではないだろうか。

## 6. 結語

本稿では、英語の会話にみられる親が子を受け手として自身を指示する際に Daddy/Mommy を用いる現象について論じた。この Daddy/Mommy は、加賀 & 廣瀬 (1997) が主張するように、聞き手の存在を意識した表現であり、話し手が自己指示を行う際に用いる無標の一人称代名詞 I とは異なる効果をもたらすことを、映画の事例を観察することによって検証した。

Daddy/Mommy を用いることによって、話し手は、親として子に対して向き合っているというスタンスを示している。この効果は、Stivers (2007) によって提唱された「関連付け」の概念を採用することによって、説明することができる。

本稿で取り上げた現象は、指示表現が会話のその場その場の状況に応じて選択されるということ、および、有標な指示表現の選択が、単に指示対象を同定するという以上のことを成し遂げるということを示す事例として位置付けられる。

## 謝辞

本稿は、話し手による自己指示に関する研究を契機に執筆しました。拙論に貴重なご助言をいただいた安井泉先生に心よりお礼申し上げます。また、第34回奈良女子大学英语学・言語学研究会(2020年12月18日)で発表した際、有益なコメントをいただいた吉村あき子先生、今野弘章先生、盛田有貴先生に感謝申し上げます。なお、本稿の不備はすべて筆者の責に帰せられるものです。

## 参考文献

- 廣瀬幸生・加賀信広 (1997) 『指示と照応と否定』東京：研究社出版。
- Land, Victoria and Celia Kitzinger (2007) “Some Uses of Third-Person Reference Forms in Speaker Self-Reference,” *Discourse Studies* 9:493-525.
- Mac Whinney, B. (2007) “The Talkbank Project,” In J. C. Beal, K. P. Corrigan, and H. L. Moisl. (eds.) *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases* vol. 1. Houndmills: Palgrave-Macmillan, pp. 163-180.
- Schegloff, Emanuel A (1996) “Some Practices for Referring to Persons in Talk-in-Interaction: A Partial Sketch of a Systematics,” In Barbara A. Fox (ed.) *Studies in Anaphora*, John Benjamins, pp. 437-485.
- Stivers, Tannya (2007) “Alternative Recognitionals in Person Reference,” In Nick. J. Enfield, and T. Stivers (eds.) *Person Reference in Interaction: Linguistic, Cultural and Social Perspectives*, Cambridge University Press, Cambridge, pp.73-96.

## トランスクリプト記号一覧

[	重複の始まり
]	重複の終わり
(0.7)	間隙 (秒)
(.)	0.1 秒前後の間隙
:	音声の引き延ばし
-	音声の中断
=	2つの発話が途切れなく密着
. / ? / ,	下降調・上昇調・継続を示す音調
^	直後のピッチの急な上昇
<u>文字</u>	周辺と比べて大きい音量, 高い音
°文字°	周辺と比べて小さい音量, 低い音
hh	呼気音
.hh	吸気音
(( ))	転記者による注釈
→	分析において注目する行